

書評

奈良 勲・鎌倉矩子 監修 富田 豊 著

標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 小児科学

竹下 研三（鳥取大学脳神経小児科教授）

今日の小児科学をひとりで記述するのはとても大変である。それほど小児科学は分化、専門化している。しかし、ひとりで記述された本が非常に読みやすいことも事実である。ことばの流れが統一され、波長が一定していてどこからでも読み始められる。さらに、内容の量的関係から著者が比重を置いている箇所が自然とわかる。

この本には著者の略歴がないので、私はなぜこのようにこの本の内容がバランスをもって統一され、読みやすいのかを著者の略歴を紹介しながら説明を試みたい。

富田豊先生は、京都大学医学部を昭和50年に卒業、ただちに小児科学教室に入局され、一般小児科学を研修された。その後、新しく新設された島根医科大学小児科学講座の教室作りのため、循環器を専門とされる森忠三教授のもとに移籍された。小児科一般の臨床とともに広く教育に専念されたのである。この本の総論の部分や循環器に関する内容の安定感はこの時代の蓄積によっている。富田先生はその後、以前から興味をもっておられた小児神経学や発達障害医学をより深く勉強されるため、鳥取大学医学部脳神経小児科に移籍され、講師を務められた。小児神経学を広く研修されるとともに神経生理学を中心とした研究ですばらしい業績を挙げられた。この本の先天異常、神経・筋疾患、代謝異常、新生児医療、心身症などの内容はこの時代の経験に基づいている。また、随所にみられる病態からの考え方は、

この時代の研究の成果である。その後、富田先生は、京都の重症心身障害児施設びわこ学園の副園長として勤務された。通常の本にはみられない重症心身障害児の欄はこの時代の経験が生きている。平成7年、広島県立保健福祉短期大学がスタートするとともに乞われ作業療法学科長として転任された。

子どもの全体を診れる小児科医であり、安定した教育者であり、臨床指向の研究者であり、小児神経の専門医であり、福祉や発達障害、リハビリテーションにも造詣の深い臨床家である。この本の安定感、読みやすさ、しかも随所にみられる新しい思想は、このような経歴に裏付けされたものであることがよくお分かりいただけると思う。

コメディカルにおける小児医療、それを支える小児科学の教育は、少子化と高齢化の狭間にゆれる日本において非常に重要な位置にある。コメディカルの中でも、リハビリテーションは看護とはお互いを意識しつつ異なった方向で努力せねばならない。まだ歴史の浅いわが国のリハビリテーションが教育と彼らの努力を通して社会にその実力の認知される日の来ることが待たれるが、この本は彼らの知識と技能修得のスタートになるガイドブックとしてすばらしい役割を果たすものと期待している。欧米で自信をもって医師と議論をたたかわしているPT、OTの姿を思い出しつつこの本の利用を期待したい。

(B5 頁224 4,000円＋税 2000 医学書院刊)

お知らせ

日本リハ工学協会 SIG 住まいづくり講習会 '00「屋外アクセス一段差を考える」

テーマ：屋外アクセス一段差を考える－

日 程：2000年8月24日（木）10：00～17：00

会 場：徳島県郷土文化会館（徳島市藍場町2-14）

定 員：80名（先着順）

申し込み締め切り：7月31日（月）

資料請求・問い合わせ先：

SIG 住まいづくり講習会事務局

横浜市総合リハビリテーションセンター企画研究室内

（担当：橋本・矢代）

Fax 045-473-1299

E-mail ZAE00257@nifty.ne.jp